言語社会研究科　博士論文要旨

著　　者　　松田　智穂子（Chihoko Matsuda)

論　文　題　目　　Derek Walcott's Theatrical Works and His Challenges as a Postcolonial Caribbean Man of Theatre

(邦訳題目：「デレク・ウォルコット—ポストコロニアル・カリブの演劇人としての挑戦とその演劇作品」)

学位取得年月日　　2011年2月9日

目　次：

Introduction

Derek Walcott as a Man of Theatre and the Gender Perspectives on his Plays

Chapter 1

Creating a National Theatre in Trinidad: Walcott's Early Career and the Trinidad Theatre Workshop

Chapter 2

Escaping from Colonial Boyhood: Reaching 'Manhood' in *Ti-Jean and His Brothers* (1957)

Chapter 3

Don Juan in the Old and New Worlds: *The Joker of Seville* (1974)

Chapter 4

Pantomime (1978), Trinidad Carnival, and Tourism as a New Colonial System

Chapter 5

Living for Caribbean Theatre: The New Caribbean Cleopatras in *A Branch of the Blue Nile* (1983)

Afterword: 'We, the Actors and Poets, Would Strut Like New Adams'

Appendix: Derek Walcott in Conversation—An Interview

概　　要：

本研究では、1992年にカリブ地域から初めてノーベル文学賞を受賞した詩人デレク・ウォルコット(Derek Walcott, 1930-)の演劇作品およびその演劇論と実践を、「男性性(Masculinity)」の主題に着目しつつ再評価する。そして、一次および二次資料の分析を通して、ひいてはこんにちに至るまで(旧)植民地カリブが、いかに特異な社会と文化に基づくジェンダー観を築き上げてきたかを探るものである。

この論点に至る研究背景は、以下の通りである。1970年代に欧米を中心にフェミニズム批評が勃興すると、文学研究の分野では女性・女性性の視点が重要な要素として浮上した。一方、ほぼ同時期に男性・男性性を扱う研究も登場したが、フェミニズムほどの興隆はみていない。というのも、Thomas Laqueurが *Making Sex: Body and Gender from Greeks to Freud* (1990)でも指摘するように、西洋のフェミニズム批評は、女性が男性によって社会的・政治経済的・文化的不利益を被っているとの前提にのっとっていたからである。そのため、家父長制と男性中心主義の言説が根づいた西洋思想においては、男性もが被抑圧者であるとの認識は薄かった。

しかしながら、このような西洋のフェミニズム批評によって半ば普遍化された「男性 ＝ 抑圧者、女性 ＝ 被抑圧者」という図式は、植民地支配と奴隷制という歴史的経験を通じて形成されたカリブ社会の状況には、過去も現在もしっくりとは当てはまらない。ウォルコットの演劇作品には女性蔑視が明白に表れている。だが、このようなウォルコットの一見した男性中心主義はむしろ、カリブ男性に特徴的にみられる男性性の欠落の裏返しだとはいえないだろうか。なぜならば、フェミニズム批評の勃興を招いた西洋社会におけるジェンダーのあり方とは異なり、長期におよび植民地支配と奴隷制によって培われてきたカリブの社会と文化においては、黒人男性もまたジェンダー的に疎外されたマイノリティであると考えられるためである。

序章において明らかにするように、カリブにおける男性・男性性に関する本格的な研究は、ようやく1990年代末になってから、社会学と心理学の分野で始まっている。西インド諸島大学のR.E. Reddockは論文集*Interrogating Caribbean Masculinities: Theoretical and Empirical Analysis* (2004) の序文で、カリブの男性性が支配階級である白人男性の男性性と対比されるかたちで構築された点を強調する。また社会学者Patricia Mohammedの論文“Engendering Masculinity” (2000)によれば、カリブの家族制度は奴隷制ゆえに母系であり、父や息子としての黒人男性を疎外する「男性の周縁化(male marginalization)」傾向にあるという。カリブ男性の男性性は、植民地社会という枠組みの中にあって白人男性によって抑圧されるのみならず、さらに家庭にあっては母や妻、娘である黒人女性によっても抑圧されてきたという一面がうかがえる。

筆者は、ウォルコットの作品における男性性の概念が、このようなカリブ地域の歴史的、社会的、文化的特異性を反映した上で、ウォルコットは希薄な男性性を修正するために、演劇作品の執筆と上演を通じて男性性の復権を志したのではないかと考える。本研究は、詩人としての評価が先行しているウォルコットの演劇作品と活動を取り上げて、作品の内容と初演状況の分析を行うことによって、日本ではほとんど知られておらず、また先行研究も乏しい脱植民地化以後の英語圏カリブ世界の歴史的・社会的・文化的特徴を明らかにする。さらには、このよ

うなカリブを例にとった作業を通じて、従来のフェミニズム批評が半ば無意識に想定する男女の権力関係がいかに西洋中心主義的であったかを指摘し、フェミニズム批評の一面性をも指摘している。この意味において、本研究はウォルコットという一作家に関する解釈やカリブ文学研究においてのみならず、広くフェミニズム批評、ジェンダー論、ポスト植民地主義といった批評理論そのものを問い直す点においても、従来にない斬新な成果であるといえる。

各章の内容は、以下のとおりである。

第一章：個々の作品を精査する前に、まずはウォルコットの演劇人としての一面を明らかにする。ウォルコットの演劇活動のもっとも重要かつ長期的な拠点となったのは、1959年に旗揚げし、のちにトリニダード・シアター・ワークショップ（TTW）という名で知られるようになった劇団であった。本劇団での演劇活動は、ナショナリズムの概念を取り入れて国民文化を作り出すという目的を明確に打ち出した点において、それ以前のトリニダードの演劇文化や劇団の活動と一線を画す。本章では、彼の演劇活動と演劇論がいかにトリニダード独自の多様な人種構成、ナショナリズムおよび文化政策と関連しながら実践されたかを探る。まずは、演劇人や政治家が演劇をいかにカリブ海地域の文化ナショナリズムの文脈の中で活用しようとしたかを探り、ウォルコットの功績を明らかにする。

第二章：初期の戯曲*Ti-Jean and his Brothers* (1957)を取り上げ、奴隷制がカリブ男性の男性性形成に及ぼした影響について論じ、それから今日、脱植民地化を図るカリブ人男性が、白人支配者との対立項として形成された黒人系カリブ人の男性性に対して、いかにして反論するかを探る。カリブ史学者Hilary Becklesによれば、かつてカリブの植民地において黒人奴隷を管理する際、白人奴隷主は‘feminization’よりも‘infantilization’という表現を好んで使用した。奴隷化された黒人男性から男性性を奪った上で、庇護される存在として扱うことで、彼らの意識を‘a pre-gender consciousness’まで退化させるためであった。これは性別がいまだに未分化な状態、すなわち社会的・文化的性差を意識して行動する以前の幼い子供の意識を意味する。奴隷主である白人男性は、黒人男性を社会的、経済的、あるいは身体的に十分な能力を持たない未成熟な男の子として扱うことにより、彼らから社会的、精神的自立を妨げ、奴隷階級の男性同士が連携する機会を奪っていたのである。そうだとすれば、カリブの黒人男性の男性性は、成人男性である白人の男性性に対する女性と位置づけられたのではなく、白人男性の「成熟した」男性性と比較して半人前である、「子供化」された男性とみなされていたと言えるだろう。

『ティジャンとその兄弟たち』において、ウォルコットは、民話を書き換えることで、白人男性と黒人女性が共に社会や家庭の中心にあって、植民地からの脱却を目指す1950年代に、黒人男性から居場所を奪っていたというカリブの状況を打開し、黒人男性を中心とする新しい家族関係とひいては宗主国から独り立ちしようとするカリブの国家アイデンティティを作ろうとした。しかしながら、本論文における女性登場人物の排除と、白人男性との対立に勝利するために、出産を含む女性の社会・文化的役割および女性性を接収しようとするカリブの黒人男性の試みは、かえって女性性なくしてはカリブ黒人男性の復権が困難であることを指し示してい

るかのようである。

第三章：カリブ風音楽劇*The Joker of Seville*(1974)において、ヨーロッパ社会とキリスト教の根底にある伝統的な異性愛主義と男性中心主義を体現する人物と解釈されてきた色事師ドン・ファンに17世紀のヨーロッパ人植民者としての一面を独自に付け加えた。第三章ではこの点に着目し、植民地主義の欲望がセクシュアリティとジェンダーに例えられていたことに光を当て、また作者は植民地支配を通じてカリブ海地域にもたらされたキリスト教的な価値観に対して異議を唱えたことが明らかにする。

第四章：カリブの宿屋を舞台にした二人芝居*Pantomime*(1978)では、劇中劇の上演を通して、英国白人である主人ハリーと黒人従業員ジャクソンの権力関係が目まぐるしく変わる。最終場では、白人女性である妻への劣等感に悩まされてきたハリーを、ジャクソンがその妻の役に扮することによって癒す。本論文では、このような劇の結末において、かつて支配者と被支配者の関係にあった二人の男性が、E.K. Sedgwickが論じた「ホモソーシャルな絆」を女性という対価交換物を介して作り出す様相を明らかにした。

第五章：戯曲*A Branch of the Blue Nile*(1983)において、女性主人公シーラは、自分はクレオパトラ役を演じるには肌が黒すぎると悩み、英国流の発音を使うように指示する白人舞台監督と衝突する。このような葛藤は、独立後のカリブが、植民地時代の遺産であり、かつカリブ文化にすでに根を下ろしてしまった英語と英文学にどのように対処すべきなのかという問題を提起する。しかしながら、男性の演劇仲間たちがニューヨークやロンドンといった白人中心主義の劇場で失敗するのを尻目に、ついには、第一世界の演技方法にとらわれることなく自分自身のクレオパトラ像を発見する。本作品の分析を通じて、ウォルコットのカリブ男性性を再構築する意図が、従来言われてきているような単なる女性蔑視・女性排除に基づくものではないことを論じた。

付録(Appendix)として、『英語青年』2008年10月号に掲載された、1992年にカリブ海地域出身者として初めてノーベル文学賞を受賞したデレク・ウォルコットへの二度にわたるインタビューの記録を付した。従来、詩人としての業績ばかりが注目されてきたウォルコットは、劇作家、劇団主宰者、舞台監督として50年以上の演劇キャリアを持ち、20本以上の戯曲を出版し、多くの賞も受賞しており、演劇人としての側面は詩作活動と勝るとも劣らずに重要である。この点から出発し、インタビューでは、いまだ国内外の学会においては研究が進んでいないウォルコットの演劇活動の理念と活躍に的を絞り、□演劇と詩の違いについて　□舞台という総合芸術を作る過程における劇作家の役割　□黒澤明などによる日本の映画作品から受けた強い影響　□ミュージカルのために韻文を書くことについて質問した。